

現代アメリカ経済と働く女性像

ハリウッド映画からみた「バブル経済」とワーキング・ガール

真瀬 勝康

アメリカの大衆娯楽映画（以下、ハリウッド映画と略称）をみてみると、エンタテインメント水準の高さからかその面白さに心から楽しめる。大衆の喜びと悲しみ、笑いとペーソスをまじえながら、スクリーンをとおしてアメリカ社会の変化やアメリカ人の意識の変化を読み取れるところに、ハリウッド映画を論じる理由がある。まさにハリウッド映画はアメリカ社会を映し出す時代の鏡である。

ここでは、『ワーキング・ガール』（*Working Girl*, 1989）をおもにとりあげながら、何本かの代表的な映画『九時から五時まで』（*Nine to Five*, 1980）『フラッシュ・ダンス』（*Flashdance*, 1982）『トップ・ガン』（*Top Gun*, 1986）などと比較しつつ、スクリーンをとおして映画の背景となった経済社会の変化とアメリカ女性像の変遷を論じてみよう。

八〇年代は女性の時代であった。否、女性の時代というならば、ウーマン・リブに代表される七〇年代のほうが女性の時代というのにふさわしい。八〇年代とは、女性が社会で活躍することが当たり前のことになり、女性の時代が定着するようになった時代と評価できる。さらに二一世紀を展望する九〇年代は「ウーマン・リブ」に象徴されるような敵対的な男女関係がひとだんらしく、新たに「実力」ある女性が男と協力するヤサシイ関係を作りあげる時代の到来を意味するのだ

ろう。

『ワーキング・ガール』は、こうしたオトコとオンナをめぐる新しい時代のトレンドを心憎いばかりに映像化した。この映画のストーリーは、国際金融の中心地、ニューヨークの証券会社に働く秘書役の主人公が企業合併部長である女性上司に復讐するというもの。主人公のテスト役にはメラニー・グリフィス、敵役の女性部長にはシガニー・ウィーバー、両者のボーイ・フレンド役にハリソン・フォードが出演しているが、ヒロイン、ヒーローのいずれも三〇代というのが登場人物の興味深い年齢設定である。それは彼らが証券会社の第一線で活躍している働き盛りビジネス・マン（ウーマン）の世界を映像化しているからである。

さて、「男・女」関係の視点から『ワーキング・ガール』をみてみると、わずか一〇年もたたないうちに、「男・女」関係が、対立から「協力」の関係へ変化していることに驚く。というのもウーマン・リブ全盛時代に製作された『九時から五時まで』のように、女が男をやっつけるのではなく、ノン・キャリア・ガールが名門大学出の女性部長を懲らしめるというもので、パートナ―（とうぜん男である！）とのロマンもからめながら、むしろ彼と協力して、M&A¹を仲介することに成功し、出世するという展開になっているからである。

『ワーキング・ガール』は明らかに、アメリカ社会がウーマン・リ

プをとりすぎたことを表現している。だからこの映画では、ヒロインがじつに女っぽくてセクシーである。こうしたヒロインのキャラクターとは反対に、敵役の女性部長は時代としてのウーマン・リブを象徴している。この映画のおしまいのところに、登場人物たちがみんなでシガニー・ウィーバー扮する女性部長を骨ざす女と悪罵するシーンがあるが、これなどは肩をいからして男の社会に挑戦した「ウーマン・リブ」の終焉を暗示しているかのようだ。

ところでこの映画のヒットの後、世界最大「最強の鉄鋼会社、『新日鉄』がリクルート広告にシガニー・ウィーバーを起用したのは、それこそ清水の舞台から飛び降りたような一大決断であろう。巷間、あの古い新日鉄がよくぞアメリカの女優を起用したと、同社のナウイ変身ぶりが評価されているが、『ワーキング・ガール』をみるかぎり、同社の「保守主義」はいささかも払拭されていないように思える。

しかし、求人広告をとおしての同社人事部の学生への隠されたメッセージは、あいかわらずブランド志向であることは明白である。この広告は映画のなかで、ノン・キャリアの役を演じたメラニー・グリフィスではなく、MBAをもつシガニー・ウィーバーを起用したことによって世の「一流大学」卒業予定者を安心させたにちがいあるまい。新日鉄サン、こんなことではリストラに成功しませんよ。

いずれにせよ『ワーキング・ガール』は、九〇年代にはばたく新しい女性の愛とビジネスの世界を描いたオフィス・ドラマであり、観客をして抱腹絶倒させながら、ストーリーの各所にロマンチックでセクシーなシーンを配したテンポの速い大人も楽しめるエンタテイメント映画であった。そしてノン・キャリア・ガールが出世し、エリート・ビジネスマンと結ばれるというこの映画の顛末は、大衆の夢工場として非日常の世界を造りだし、結末はいつもハッピー・エンドという伝統的なハリウッドの女性映画そのもの（ガール・ミーツ・ボーイ・エンド・ハッピー・エンディング）であった。（写真1参照）



写真1

というのも、このような『ワーキング・ガール』のストーリーは、おおかたのノン・キャリアの女性にとっては全くありえない夢物語にすぎないからである。

それを象徴するかのように、この映画では冒頭から「自由の女神」が大写しにされるシーンがあった。ズームアップされた女神像はこれから始まるストーリーがアメリカン・ドリームであることを強く暗示していたのである。

ところでアメリカにおける女性の社会参加は、第二次世界大戦後、数量的に、一貫して増大してきた。アメリカにおける女子労働力人口は、今世紀初頭、約五三〇万人だったものが、アメリカが第二次世界大戦に参戦する直前の一九四〇年には、約一二〇〇万人へと四〇年の

間に倍増し、朝鮮戦争の始まった一九五〇年には約一七〇〇万人⁽²⁾へ、さらに直近の一九八七年には、五三〇〇万人へ急増した。そのなかで、当初は、女子労働力人口に占める未婚者の比率が相対的に高かったものの、第二次世界大戦後（一九五〇年）にはその比率が逆転し、直近の数字では女子労働力人口に占める既婚者の比率は約六割（五九・一％）も占めるにいたっている。これに死別・離婚した女子労働人口をくわえると、全体の八割弱を占めている。このことからアメリカの女子労働者とは結婚しているか、または結婚を経験したことのある年齢層が大半以上を占めているということがわかる（表参照）。いいかえれば、アメリカの女子労働者とは日本のOLのようなピチピチ・ギャルは少数なのである。

かつてブレイヴァマンは、このようなアメリカ女子労働力人口の身を吟味し、「合衆国の家族内におけるもつとも一般的な職業組合わせの一つは半熟練労働者の夫と事務員の妻である」と指摘した。ここでいう事務員とはアメリカにおける女性の代表的な職業である「セクレタリー」⁽³⁾。秘書である。セクレタリーの職業とは、数多くの高卒女性がまず最初に、そして集中的に就職するという特徴がある。小学校教師、看護婦および秘書は、女性の雇用が集中する代表的な職種（国際自由労連婦人政策局）である。いわば、これらの職種は、女性の三大性差別職種であり、いまや国際労働運動のきわめて大きな政策課題となっているのである。

かくして、映画『ワーキング・ガール』は、一般のアメリカ女性にありえない現実をセクレタリー役のテストが、部長役のキャサリンをヤツつけるという物語をとおして大衆の暗い願望を映像化したのであった。

例えば、ハリウッド映画は大衆の夢工場としてそれこそ数多くのヒロインたちを誕生させピンナップ・大スターを輩出してきた。時代を戦後に限定しても、五〇年代のハリウッド映画全盛時代における

アメリカにおける女子労働力人口推移（1940年～1987年）

年	女性労働力人口 (1,000人)				女性労働力人口 (%)			女性人口に占める 女性労働力人口の割合(%)					
	計	未婚者	既婚者		未婚者	既婚者	死別 離婚	計	未婚者	既婚者		死別 離婚	
			計	夫と 同居						計	夫と 同居		
1940.....	13,840	6,710	5,040	4,200	2,090	48.5	36.4	15.1	27.4	48.1	16.7	14.7	32.0
1944 ² ...	18,449	7,542	8,433	6,226	2,474	40.9	45.7	13.4	35.0	58.6	25.6	21.7	35.7
1947 ² ...	16,323	6,181	7,545	6,676	2,597	37.9	46.2	15.9	29.8	51.2	21.4	20.0	34.6
1950.....	17,795	5,621	9,273	8,550	2,901	31.6	52.1	16.3	31.4	50.5	24.8	23.8	36.0
1955 ² ...	20,154	5,087	11,839	10,423	3,227	25.2	58.7	16.0	33.5	46.4	29.4	27.7	36.0
1960.....	22,516	5,401	13,485	12,253	3,629	24.0	59.9	16.1	34.8	44.1	31.7	30.5	37.1
1965.....	25,952	5,912	16,154	14,708	3,886	22.8	62.2	15.0	36.7	40.5	35.7	34.7	35.7
1969.....	29,898	6,501	19,100	17,595	4,297	21.7	63.9	14.4	41.6	51.2	40.4	39.6	35.8
1970.....	31,233	6,965	19,799	18,377	4,469	22.3	63.4	14.3	42.6	53.0	41.4	40.8	36.2
1971.....	31,778	7,220	20,034	18,573	4,524	22.7	63.0	14.2	42.5	52.8	41.4	40.8	35.7
1972.....	33,132	7,543	20,845	19,336	4,744	22.8	62.9	14.3	43.7	55.0	42.2	41.5	37.2
1973.....	34,195	7,838	21,487	19,951	4,870	22.9	62.8	14.2	44.2	55.9	42.8	42.2	36.7
1974.....	35,708	8,362	22,202	20,541	5,144	23.4	62.2	14.4	45.3	57.4	43.8	43.1	37.8
1975.....	36,981	8,599	23,037	21,360	5,345	22.2	62.3	14.5	46.0	57.0	45.1	44.4	37.7
1976.....	38,399	9,282	23,643	21,814	5,474	24.2	61.6	14.3	46.8	59.2	45.8	45.1	37.3
1977.....	40,053	9,702	24,429	22,681	5,922	24.2	61.0	14.8	48.0	59.2	47.2	46.6	39.0
1978.....	41,747	10,487	24,976	23,136	6,284	25.1	59.8	15.1	49.2	60.7	48.1	47.5	39.9
1979.....	43,844	11,304	26,073	24,223	6,467	25.8	59.5	14.8	50.8	62.9	49.9	49.3	40.0
1980.....	44,934	11,242	26,828	24,900	6,864	25.0	59.7	15.3	51.1	61.5	50.7	50.1	41.0
1981.....	46,415	11,628	27,536	25,460	7,251	25.0	59.3	15.6	52.0	62.3	51.7	51.0	41.9
1982.....	47,095	11,801	27,843	25,756	7,451	25.1	59.1	15.8	52.1	62.2	51.8	51.2	42.1
1983.....	47,779	12,282	28,140	26,227	7,357	25.7	58.9	15.4	52.3	62.6	52.3	51.8	41.2
1984.....	49,240	12,581	28,883	26,855	7,775	25.6	58.7	15.8	53.2	63.1	53.3	52.8	42.1
1985.....	50,891	12,925	29,755	27,716	8,211	25.4	58.5	16.1	54.5	65.2	54.7	54.2	42.8
1986.....	51,732	13,127	30,274	28,197	8,332	25.4	58.5	16.1	54.7	65.3	55.0	54.6	43.1
1987.....	52,960	13,454	31,282	29,159	8,224	25.4	59.1	15.5	55.4	65.1	56.1	55.8	42.9

1. 配偶者と別居中の既婚者を含む 2・4月現在

資料：1940～1955年はU.S. Bureau of the Ccnsus, *Current Population Reports*, series P-50. 1960年以降はU.S. Bureau of Labor Statistics, Bulletin 2096, および未刊行資料

出所）合衆国商務省センサス局監修 鳥居泰彦訳「現代アメリカデータ総覧」（原書房、1990年、374ページ）

『陽のあたる場所』のエリザベス・テラー、『トルワー・ラブ』のグレース・ケリー、『ローマの休日』のオードリー・ヘップバーン、さらには『お熱いのがお好き』のマリリン・モンローなどは、その若さと美ぼうで大衆の心をトリコにしたのであった(写真2参照)。



写真2

これらハリウッド映画黄金時代の「大女優」たちとウーマン・リブの吹き荒れた六〇年代後半から七〇年代の映画のなかで活躍していた女優たちを比べると、ハリウッドの意外な保守主義に気がつく。彼女たちが主演した映画の題材こそ、その時々テーマにあわせた社会性をもりこんで、以前のたんなる恋愛映画とは異なっているものの、登場する大衆娯楽映画のヒロインたちは、基本的には、ハリウッド映画における典型的ヒロイン像を踏襲しているのであった。これらのヒロインたちに共通する特徴を大胆に表現すれば、それは、彼女たちがいずれも若い「カワイコちゃん」である、ということだ。

このような女優の基本的特徴は、女の自立が定着したといわれる八〇年代に入ってもあまり変化しなかった。八〇年代を女性ファッションにたとえていうと、「肩パットを分厚く入れて、男の社会に肩をいからせて分け入った時代」(森英恵)ともいえる。こうしたウーマン・リ

ブの影響が、ハリウッド映画にもおしよせてきた作品の例として『フラッシュ・ダンス』があげられよう。

この映画は、風俗としてのウーマン・リブが、スクリーンにどう反映するかをよく映しだしていた。典型的な男の職場でも女性が、おなじように働けることをさりげなく描いた『フラッシュ・ダンス』のジェニファー・ビールスを見よ(写真3参照)。彼女はこの映画のなかでは、製鉄所解体工事の溶接工として働いていた。男たちにまじって若い女性が厳しい現場作業＝肉体労働をしていることを映しだしている点が、この映画の注目すべき特徴である。



写真3

溶接工の仕事は、今様日本風に表現すれば、典型的な3K(きたない、きつい、きけん)の仕事である。合理化の遅れたアメリカにおける製鉄所の現場作業も騒音、高温、ほこりでそれこそすさまじい現場作業なのだが、工場解体現場は、それよりもさらに作業条件は悪い。そもそも工場解体なのであるから、もうもうたるほこりなかで火花による火傷のおそれやスクラップがいつ頭上から落ちてくるかもしれない危険ななかで、それこそ汗まみれになって、あのジェニファー・ビールスが働かなければならなかった!

これほどウーマン・リブの時代を感じさせる設定はないであろう。『フラッシュ・ダンス』は、おりしも七〇年代末から八〇年代初頭に

かけてのピッツバーグを舞台にした大規模な工場閉鎖を描いていたのであるから時代設定は申し分ない。

当時、ピッツバーグの新聞は、「伝統的(男の)職場に挑戦する働く女性がふえる」という見出しでこうした状況を次のように報じていた。

おりからの鉄鋼不況のなかで事務職を失業したある婦人労働者が機械据え付け工の仕事についた例やレイオフされたレンガ積み女見習い工の例などをひきながら、ここピッツバーグ地区において、数百人の女性が、オンナにとって非伝統的な仕事すなわちヘルメットをかぶるような危険な肉体作業をすすんで選択するようになった。もとよりこうしたケースは、全体のなかでは、まだまだレア・ケースであるが、ヘルメットをかぶるような危険な肉体作業を選ぶ女性の数は、年々ふえている。厳しい不況による何千ものレイオフが、女性にとって非伝統的な職場に進出させる経済的な理由になっている。

記事の最後に、危険作業についている婦人労働者の夢として女性大統領が誕生すべきこと、国会議員がみな女性になること、男がタイプを打ち、育児に専念すること、女性の上司のために男がコーヒールを用意することなどをあげていた。この記事は、男女平等を激しく求めている当時の熱いウーマン・リブの息吹を伝えている。

しかし、ハリウッド映画では、あいかわらずキュートな「カワイコちゃん」をヒロインに起用していた。状況は少しずつ変化した。時代の変化を物語るように、「カワイコちゃん」よりも成熟したキャリア・ウーマンが登場する。メル・ストリープの『恋に落ちて』(Falling in Love, 1984)、『トップ・ガン』のケリー・マグギス、『危険な情事』のグレン・ローズなど個性の強い女優がスクリーンのなかで活躍するようになった(写真4参照)。

これらの映画のなかで、メル・ストリープは人妻のデザイナー役で、ケリー・マグギスは、空軍パイロットに航空力学を教える博士号

をもつ教官役で、グレン・ローズは、ニューヨークにある出版社のエディター役に扮し、高度で知的な仕事をもってバリバリ働くキャラクターを演じた。彼女らは、かならずしも若くない(三〇代)がじゅうぶんに成熟し、キャリアがあつて、しかも背がきわめて高い。まさに、アメリカのビジネス界で成功した男たちの二度目の妻(トロフィー・ワイフ)にピッタリの条件を備えている。彼女らが魅力的であることはいうまでもないが、いずれも日本の基準では、あきらかに「オバサ



写真4

ン」である。

女優たちの「高齢化」現象は何を意味するのであろうか?こうした現象の背景には、アメリカの製造業衰退→産業空洞化と経済のサビ化進展と関係がある。八〇年代初頭に吹き荒れた東部製造業切り捨ての結果、いまやアメリカの第二次産業の構成比は、一九六五年の三五・四%から二五・八%にまで低下し、反対に第三次産業の構成比は、それぞれ六一・三%から七二・二%へ急増している。それとともに、アメリカ産業の地理的軸心も東部・中西部からいわゆる南のサンベルト地帯へ移動したのであった。その過程でアメリカの基幹産業もそれまでの繊維、電気、鉄鋼産業などの伝統的なローテク製造業からエレクトロニクス、コンピュータ、航空宇宙産業、金融・保険・証券業などへ変化した。これはまた、同時にニューヨークが国際金融の世界的センターとしての地位をより強化することでもあった。

それとともに、こうした産業構造の変化は、コンピュータ技術者、経営コンサルタント、弁護士、会計士、株や外国為替のディーラー・ブローカーおよびデザイナーという高度に知的で専門的な職業を新たに大量に必要とした。ここに一部の能力ある女性が、男たちの支配するビジネス世界において成功をおさめる可能性ができたのである。かくしてキャリア・ウーマンが男たちに注目され、それに多くの女性があこがれるようになったのも当然である。こうした状況を反映してか、最近のハリウッド映画は、世界的大都市・ニューヨークを舞台にした映画を数多く製作するようになった。本稿でとりあげた『ワーキング・ガール』をはじめとする映画はもちろんのこと、思いつくままに数えても、『夜霧のマンハッタン』(Legal Eagles, 1986)、『ウォール街』(Wall Street, 1987)、『東八番街の奇跡』(Batteries not included, 1987)、『危険な情事』(Fatal Attraction, 1987)、『摩天楼はバラ色』(The Secret of my Success Story, 1987)、『再開の街』(Bright Lights, Big City, 1988)と、それこそ目白押しである。

ところで、フォーチューンはアメリカの企業経営者重役たちの生活スタイルやその変化についてレポートすることがある。そのなかで会社重役たちの再婚問題の特集があった。それによれば、これまでアメリカでもっとも保守的な世界として知られていたビジネス界では、会社のトップになるチャンスを得するという意味で重役たちの離婚はタブーになっていたが、最近では(一九七〇年以降)、離婚は出世の妨げにはなくなり、離婚→再婚が増大する傾向にあると、レポートしている。離婚の原因になったのはたいていの場合、彼らが、同じ職場や仕事の関係で若くて、自立した女性を発見することからはじまった。そして彼らが、再婚したセカンドワイフの特徴は「夫よりも一〇〜二〇才若くて、時には一六・七センチ背が高く、美人で、洗練され」⁽⁸⁾ているというもの(写真5参照)であった。もつともこういったからと

いっても、彼女らは成功した男たちのたんなる飾り物ではない。日本とはちがって、夫婦いっしょの社交生活が重要な意義をもつアメリカでは妻の役割が大きい。夫に愛人ができ結婚生活が破たんした場合、それは再婚にいたる。だから外見的にみて、美人で堂々としていっているだけでなく、彼女らは夫のよきパートナーとしての実力をもっている。とくに彼女らは、夫のアフター・ファイブの社交生活をおして夫の仕事の側面から強力にサポートしていることがレポートされて

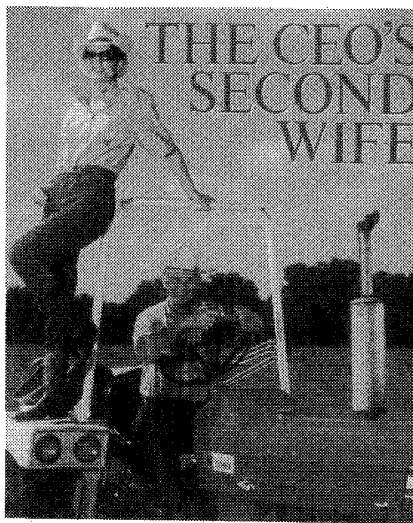


写真5

いる。

再婚はいうにおよばず、三度、四度と彼らが結婚をくりかえせるのは、近年におけるアメリカの企業合併・買収ブームのなかであみだされた買収相手企業の資産を担保に買収資金を調達するという、まさに現代の錬金術ともいえるべきLBO⁽⁹⁾によって途方もない資産を形成できたからであった。この特集に登場した代表的な経営者たちは、いずれもこのLBOによって億万長者になった、という。そしてこのLBOによる錬金術がウォール街の証券マン(ウーマン)にもおすそ分けされて、映画『ワーキング・ガール』の題材にもなったのである。まさにバブル経済アメリカ版である。

バブル経済という点ではわが日本もアメリカには劣らない。それで

はアメリカと同じような現象がおきていないだろうか？

わが国では、昨年、渡辺淳一の『うたかた』がベストセラーになった。この作品は、日本の『ウォール・ストリート・ジャーナル』を自負する『日本経済新聞』に連載されたことにもよるが、いわば日本のCEO^⑩ないしその予備軍ともいえるべき大企業の社長・重役たちの間に数多くの読者を獲得し、そのなかから予想外に数多くの反響を獲得した。わが社長・重役たちの書評・読後感と『フォーチュン』誌の特集号と比較してみると、非常に興味深い。

「渡辺不倫文学」に一境地を開いたとされるこの作品にわが国の一流企業の社長・重役たちが「あこがれ」のような読後感を数多くのべている。日本の経営者の場合、とくにサラリーマン経営者であればあるほど資産や収入の点でアメリカの経営者とはまだまだ比較にならないほどブアーである。ところが一九八五年のプラザ合意以後の「株高」「土地急騰」は、予想外の資産膨脹をもたらした。思わぬ巨額のカネをつかんだ経営者たちの願望が『うたかた』への隠された共感となっているのではなからうか？

もともと日本で今、企業の第一線で活躍している経営者は、戦後の経済成長を文字どおり牽引してきたジェネレーションである。いわば、

彼らはこれまでずっと前ばかりむいてビジネス世界を駆け抜けた人たちといえるであろう。いつ倒産するかもしれないチツポケな企業を世界の大企業にまで成長させ、今や、功なり、名をとげ、思わぬ資産を手にした社長サンたちがふと自分をふりかえって死に物狂いで働きずめであった時代に忘れていたものを思いだしても何ら不思議なことではない。しかし、日本の社長サンは「純愛」にはあこがれても不倫を実践し、長きにわたり築きあげた夫婦関係を精算し、アメリカのようにドライに再婚するにはいたっていない。あくまでもこれまでの夫婦生活を維持する強い志向性をもっている。

ある批評が『うたかた』は大人のメルヘンといったが、アメリカでは不倫が再婚となるのに対して、日本の社長サンたちのひそやかな不倫願望という対比は日米社交生活及び家族観のちがいと認識できよう。その他、日米不倫事情には数多くの相違があるが、いずれにせよ、日米ビジネス界の最前線を指揮する経営者が新たな生活を築きあげたり、それを夢想するような時代に九〇年代が到達していることが興味深い。この意味で、現代キャリア・ウーマンの登場とともに、日米経営者の「不倫」及びそれへの願望は、現代バブル経済の思わざる社会現象といえるであろう。

- (1) Merger and Acquisitionの略称で企業の合併・買収のこと
- (2) *Special Labor Force Report* 22, BLS, January 1981
- (3) 合衆国商務省センサス局監修、鳥居泰彦監訳『現代アメリカデータ総覧一九八八』(原書房、一九九〇年)
- (4) H・ブレイヴァーマン著、富沢賢治訳『労働と独占資本』(三八四頁、岩波書店、一九七八年)
- (5) *Pittsburgh Post-Gazette*, July 8, 1982
- (6) 佐和隆光編『サービス化経済入門』(四〇頁、中央公論社、一九九〇年)
- (7) The CEO's Second Wife, *FORTUNE INTERNATIONAL*, August 28, 1989
- (8) *Ibid.*, p.45
- (9) *Ibid.*, p.47
- (9) Leveraged Buyoutの略称で借入金による企業買収のこと
- (10) Chief Executive Officerの略称で取締役会長のこと